

アムステルダムから車で一時間弱。学園都市ライデンの隣町フォルスコーテン市の一角の静かな住宅街である。家の前は舗道つきの道路。舗道に面して小さな前庭があり、花や植木を楽しめるようになっている。元わが家だったそこには、オランダの四月初旬はまだ寒いのに、赤や白の春の花が咲いていた。めぐりの風景は私の記憶そのままである。近くには運河がある。白鳥がいる。跳ね橋がある。羊がいる。遠く牛が遊んでいる。二十年ぐらいではオランダの郊外の風景は変わらないらしい。

オランダ在住の藤木さんと朋子と私の三人が、家の前をうろうろしていたら、家から六十年配の男の人が出でた。藤木さんがオランダ語で、事情を説明してくれる。「どうぞ、よければ入って家を見てつてください」

彼は私たち三人を家に招き入れてくれた。一階は、リビングとダイニング・キッチン。二階に書斎、寝室、クローゼット、風呂場等のプライベート空間がある。

「二階もどうぞ。上がつて下さい」

突然きた日本人を不審がりもせずに案内してくれる。「どうです。二十年前よりよくなつたでしょう。この家、成長したでしよう」

キッチンやダイニング、書斎や風呂場は、リフオームで形が変わっている。彼はそれが得意で、家の現状を見せびらかしたい氣があるらしい。

私たち日本人は、木造住宅が多いせいか、二十年、三十年の間に家は劣化してゆくと考えがちである。木造でも百年以上健在な堅固の家もあるが、大抵四十年、五十年の頃だつたと思う。多摩川の土手を自転車で三十分

## 短歌の現在 番外

### No.441 「家」のこと3

佐佐木幸綱

六十年ぐらいで建て替える。地震がないオランダでは、石造りの家なら三、四百年、レンガ造りの家でも百年以上もつ。家は、手入れさえすれば、劣化するのではなく成長するのだ。

この家にいたころ、頼綱は小学生だった。定綱はまだ小学校入学前。定綱用に自転車店にあつた一番小さな補助輪つき自転車を購入したのをおぼえている。

さて、話をもとに戻そう。

父治綱が急死して四、五年ほどして、母由幾の決断で西片町「ろノ五号」の家と土地を売却。当時はまだ田舎だった二子玉川に引っ越した。高島屋ができるずっと前である。家の近くにはまだ田圃がたくさん残つており、蛙の鳴き声が聞こえ、雀が飛んでいた。「都落ちだなあ」と実感した。西片町の家を売却し二子玉川の家を購入した差額で、私は大学に通い、大学院に行つたのである。西片町から早稲田までは都電を使って三十分かかるなかつたが、当時の二子玉川からは遠かつた。まだ地下鉄がない時代である。一時間半以上かかつた。終電過ぎまで飲んで、仕方なく朝まで飲み続けたこともあつた。

二子玉川の家は母と二人で住むには、まあ広い木造平屋建ての建売住宅だった。生意気にホームバーなどを作つて（カクテルなどが流行している時代だつた）、よく友人を呼んできたりした。ピンキーという名前のボクサー犬を飼つたりもした。

その頃だつたと思う。多摩川の土手を自転車で三十分